

井化館



司

馬

遼

太

郎



中

央

公

論

社

花の館

昭和四十五年十月三十日 初版発行
昭和五十一年一月二十日 四版発行

著者 司馬遼太郎

発行者 高梨 茂

印刷 三陽 社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二―一
電話（五六二）五九二二

©一九七〇年 検印廃止

花
の
館
四
幕

登場人物

日野富子

足利義政

浄土寺義尋

乞食僧

彦六（のち鬼の兵六）

嬉野

銀阿弥

相阿弥

侍頭定時

おふう

義尋の伴の者

笛の少女

地獄の使者 男1

地獄の使者 男2

地獄の使者 女

関所の武士たち

富子の侍女たち

義政の兒小姓

義政の近習の者たち

嬉野の兒侍従

亡者ども

火事場に逃げまどう群衆

第一幕

幕があく。

男二人、女一人。コーヒーを飲んでいる。

この三人は地獄から来た使者。きょうの観客に何場面かの人間の光景を見せようとしている。椅子、テーブル、コーヒーカップ、きわめてモダンなもの。三人の風体だけは異様なコスチューム。これも西洋中世の樵夫風の服装をアレンジした独創のものを。

男女の会話、きわめて軽薄、モダン、そのくせ野暮ったし。たとえば近郊農村あたりから出てきて、新宿でよたっている若者たちの調子か。この三人、幕があいたのも気づかずに夢中で話しあっている（女は大阪弁、一人の男も大阪弁、他の一人の男はやや千葉県なまりの東京弁）。

男1 （奇声） けったいな話や。

女 なにが？

男1 おれがやがな（自分の鼻を指さす）。おれが地獄に堕ちてしもうたことがやがな。な
んで堕ちたんやろなあ。おれは浮世でなんにもせえへんかったんやでえ。ええことも
せん、悪いこともせん、生れて死んだ、それだけのこっちゃ。そんな人間でもやっぱ
り堕ちるのかいなあ、地獄に。

女 未練たらしい。なんにもせんかったというて、あつかましい。あんた、生きたやない
か。

男1 生きたがな。

女 生きたちゆうことをしたわけや。

男1 （驚いて）それが、した……ちゆう……

女 ああ、生きたちゆうことが元来、した、ちゆうことや。

男1 へーえ。（頭をかかえる）

女 （男1を見てワケがワカランといったふうに首を振り、やがて男2を見て）で、あんたは？
何したん。

男2 私が地獄に堕ちたのはね、生きすぎたからなんです、はあ、そういうことなんです。
女 生きすぎた？ あんた、若死したはずやないか、三十五のとき女に殺されたちゆうや

ないの。

男2 つまりそうです。(氣どって)つまりですな、私は生れつきどうしようもなく過剰な

……

女 過剰な？

男2 いのちを持ちすぎていた。

女 いのち。

男2 生命力と言ってもよろしい、俗にいう精力と言ってもよろしい、ぎらぎらした……。つまり、そのように生れついてしまった。そのため、それを満足させるためには一人の女ではどうにもならない。十人、百人。

女 百人も。

男2 それは嘘です。妻を得て、もう三人ばかり女を得たいと思って追いつめて、それだけにさんさん金を使って、やっと三人とも得たかと思うと、妻に殺されてしまった。だから四人(指を四本出す。やや自嘲風に)、あつははは、私がこの世でやった悪というのは、なんだろう。それが悪とすれば、過剰ないのちを持って生れてきただけのことだ。そのうまれたということも、私の行為ではなく、私を産んだ母親の行為だ。する

と、私はこの世でどういう悪をしたのか（やや昂奮して立ち上る）。地獄に堕ちるに価する悪を私はしたか。悪とはなにか！ 悪などはこの世にないではないか！（ドシンとテーブルを叩く。コーヒー茶碗が割れる）

女（驚いて顔をあげて）あかんあかん、もう幕が上つてるがな。お客さんがいっぱい来たはる。早うせんと。（コーヒーを片付ける恰好）

男1（立ち上り、アナウンサー風の標準語で）ということでございます、私どもは地獄からこの世にちよつとまいっております。

女（あわてて男1のすそをひっぱる）あんた。亡者が演説するアホがあるかいな。

男1 大丈夫や、見えへんねや。わしら亡者の姿は、いや声も姿も、お客さん方には見えへんねや、大丈夫や。

男2 ははあ、見えてませんか、（うつむき、自分の胸や腹をバタバタさわったりして）それなら大丈夫だ、……（金切声で）頃は室町の頃……

女 なんやなんや。（声に驚いた恰好）

男2 なんやて君、これから映る幻のことですよ、（また金切声をあげて）頃は――。

男1 頃は。

男₂ 室町の頃。

女 所は。

男₁ 花のみやこの京の街。

男₂ 正確には街はずれも含む！

男₁ さよう、所は、正確には街はずれも含む京の街。

女 ごらんくださる方々は、いまの人（客へ掌を向ける）。まだかいな、（奥の支度を気にするようにイライラして、奥へ叫ぶ）さあ。（先前^{さいぜん}とはガラリと変った威厳をもって）さあ、お前たち亡者ども、出てくるがよい。

音楽、暗闇、やがてわずかな光。

舞台の奥に、点々と汚物かポロギレの塊りのようなものがある。シーンとしている。

女 （それらポロギレへ亡者どもへ向って）お前たち、何をしている。たかが人間どものくせに、それも亡者のくせに、何をもったいぶるのだ、早く出よ、舞台へ出よ。

汚物の塊りの間から、笛を持った可愛い少女が、飛び出して来て、吹きはじめる。塊りたち、揺れるように動きはじめ、低い叫びを洩らしはじめ、少しずつ、前へ。陰微に前へ。

さて彼らが舞台中央にたどりついた時、急に引き裂けるような叫びが一閃し、塊りたち、壊れる。壊れたものたち、舞台中央寄りのそれぞれの場所で、もどかしく叫び声をあげ、のたうちまわる。舞台に、抑圧された人間（足や手のないもの、曲ったもの、盲目、癩病患者、気違い、ヒステリー女たち……）の感情。彼らは言葉では表わせない原感情のようなものを呻き、叫ぶ。が、その叫びの持つすべての意味を聞き届けるものがないことを、ものたちは本能的に知っており、それゆえ、その叫びは異様に人間的な響きを持っている。

と、頭上に重苦しい押しつけるような音が聞え、奇怪な形をしたもの（実は関所である）が、叫びをあげるものたちに落ちてくる。笛の少女の悲鳴、かなりの長い間、続く。異様な一群、奇声をあげ、飛び散る。散るとそれぞれ定められた位置にうずくまる。うずくまると、それが、石ころ、土塊、木の幹等のように見える。少女の姿、消える。

さて、これで、鷹野坂関所の舞台が出来上ったことになる。京とは反対の方角から、諸国行脚の旅僧がトボトボやってくる。衣服はボロボロに破れ、破れたところに泥がこびりつき、長かった旅が、僧にとって、尋常なものでなかったことがわかる。

僧 疲れた。脚腰がいたむ。（手をあげて、指を折る）なんと。（叫ぶ）十二カ国。十二カ国の

境を越えて来た。もう、疲れて……目までかすむ。が、弱音は、弱音は吐くまい。そ

んなひまでも私にはない。許されもしない。(自分の言葉に驚いて) 許されも……たれに
だらう、たれに許されていないのだらう。……如来さまにか。(うなだれてつぶやく)
南無阿弥陀仏。ああ、お念仏ではどうにもならぬ。この世が、お念仏をとなえるだけ
で救われるものなら、こんなめでたいことはない。(あたりを見廻す)

音楽。静かに。木や切株、石、になっている亡者ども、いっせいに動く。音楽止る。

僧

が、いったい、人が人を救うことができるものなのか。(拳で自分の頭を打つ) 何を言う
のだ、この私は、人を救いたいがために十二ヵ国を行脚してきたのに、いまさら何を
言うのだ。(間) 私は、来た。(間) 遠くから来た。来たのだ、救うために。国々では何
十万という人々が、病に倒れ、飢えに苦しみ、しかも互いに奪い合い、殺し合い、血
を流している。(間) 人が人を救う、それは王者がやるべき仕事なのだ。王者が、もし
単純に強く、あくまでも人が人を救えるという信念をもって権力を握る時、その時は
じめて人が人を救えるのだ。(間) が、まさか私が王者になればせぬ。ところが、(伸
び上って見るように) いらっしゃるのだ、そういう方が。いまは出家の身に過ぎなくて
も、いずれはこの国の王者になれる方が。(間) もうすぐ。夜明けとともに、そのお
人が、比叡の山をお降りなされて、この坂のあの(関所を見て) 関所を通して、京へ

入られるはずだ。(間)私は、この世の悲慘を数多く見て来た。悲慘を見ること、それが、私の生涯だったと言ってもいい。(間)だから、私は待つ。待って、私の思いをあなたの方に託さなければならぬ……

むろん、この僧侶の長ゼリフの間に、石ころたち、土塊たち、木株たちが、わずかに動いて、叫びを洩すということがあってもかまわぬ、というより、おそらくそうなるであろう……

同じ方角より、年の頃、二十七、八歳の男銀阿弥(元能役者)登場。酔っぱらい。その酔いかたは、どこか陰惨な狂気を含み、落ちぶれた、みじめな恰好でやってくる。

銀阿弥 関所か！(柵に触れながら) 関所か！(なお触れながら) 関所か！ どうかに行きてえ……。 (財布を取り出して) けど、空っぽだ。すっからかん。バクチですって、酒をくらって……女を買って…… (突然) 京は嫌いだ！(柵を揺さぶりながら) 関所か！

暗いなあ……世のなか、みな暗いなあ……けど俺の心のほうがもっと暗い……。 (間。僧に気づいて) たれた！

僧 あっ、驚かして申しわけございませんぬ。僧でございます。しがない旅の僧で。

銀阿弥 坊主か。

僧 はい。

銀阿弥 くそ坊主か！

僧 はあ？

銀阿弥 坊主、くそ坊主、おもしろくない！（間。呻き声をあげ、その場にうずくまる）

僧 どうなさいました。

銀阿弥 痛む！

僧 どこが……でございます……お腹？

銀阿弥 さしこむ！

僧 どこが。

銀阿弥 えぐる。

僧 どうやら飲みすぎていらっしゃる。

銀阿弥 いつもだ。

僧 いつもそんなに飲まれるので。

銀阿弥 黙れ。

僧 （包みより、枯草のようなものを掴み出して）これを……もそつと、これへ。さあお寄り下

され。この薬を差し上げます。

銀阿弥 都は、嫌いだ。

僧 都ではござらん、これは薬です。

銀阿弥 這いつくばっておれば、すぐに治まる。

僧 薬です。

銀阿弥 犬だ。犬畜生の気持だ！

僧 投げますよ。

銀阿弥 かまうな。

僧 額に脂汗がにじんでいるのが、こちらからでも見えます。よほどの痛みに違いない！

なぜ薬をお受取りにならないのですか！ さあ投げます。ほらっ……拾いなさい！

銀阿弥、薬草を拾い上げるが、すぐに棄てる。

僧 なにをなさるのです！

銀阿弥 ふん、猫撫で声を出しやがって、おれには救いなんぞ要らねえんだよ。

僧 ではなにがあなたに必要なのです。

銀阿弥 こいつさ（胃を指さして）、この痛みが、なにもかも失ったおれの最後の友達だ。